

坂本竜馬と明治維新

徳山 篠原 淳一

坂本竜馬は高知城下の才谷屋という豪商の生まれです。商家ながら坂本家は代々郷土株を買って生活していた裕福な一族でした。竜馬は末弟として生まれ、乙女という実姉に幼いころから育てられました。乙女姉さんは170cmを超える体格で「御仁王様」とあだ名があります。彼女の容姿が仁王像に似ていたからでしょう。

当時の彼女の写真が現存していますが、骨格雄偉な婦人で芯の強さを感じさせる顔立ちです。剣術や薙刀は皆伝に達し文武両道の女傑でしたが、結婚運が悪く離婚した後は実家に戻って竜馬を育てています。

幼いころの竜馬は泣き虫でよくオネショをしたという有名な逸話があります。実母が早世したため乙女姉さんが母親代わりに武家としての厳しい教育をしたようです。

彼女は竜馬にとっては実の母親以上の存在だったようで乙女姉さんへの手紙が一番多く残っています。

現在、竜馬の手紙は秀吉と共に書簡文学の最高傑作とされています。

両者とも文面に俗語や方言が多用されているため、妻や姉に対しそれぞれが愛情豊かな表現内容になっていて、読み手の情に強く働きかけるものがあります。

幕末の土佐藩は山内侍と呼ばれる上士階級と長宗我部侍と呼ばれる郷土階級が互いに反目していました。これは関ヶ原の戦いの勝ち組と負け組を意味しますが、上士の無礼打ちが許されるほど上下関係がたいへん厳しかったようです。

ちなみに武市半平太は白札と呼ばれる準士官階級に属しています。

さて幼少期の竜馬の愚鈍さを心配した兄の権平が高知城下の剣術道場に通わせました。

メキメキと腕が上達したため、権平は江戸の千葉定吉の道場に入門させましたが、定吉は北辰一刀流開祖千葉周作の実弟で「千葉の子天狗」と呼ばれた有数の剣客でした。江戸遊学の際、竜馬に

送った兄権平の手紙が現存しています。

「男児の志を遂げるまでは土佐に帰らずしっかり剣術に励みなさい」という内容で竜馬を思う親心がひしひしと伝わる文面です。このような深い兄弟愛に恵まれてのびのびと育った竜馬でした。

江戸に剣術修行に赴いたころは身長170cmと当時としては大男に成長しています。数年で北辰一刀流の免許皆伝に達し、千葉道場の塾頭にまで登りつめますが、もともとの拳銃好きで実戦での斬り合いは生涯に一度もなかったようです。戦闘場面では必ず拳銃で応戦し刀を抜いての応戦は記録にはほとんどありません。性格的に斬人斬馬が嫌いだったのでしょう。拳銃の腕は百発百中だったようです。

竜馬の写真が現存していますが茫洋とした風貌で当時珍しかった靴を履き懐手したものです。懐には拳銃を持っていたのではと推測されます。生来の近視があったため遠くを見つめるような眼差しでいかにも土佐風の男性的風貌です。

女性関係もなかなか賑やかで、千葉道場での修行中に千葉定吉の娘、佐那子と恋愛関係になり結婚まで約束したようですが、結局竜馬は出奔してしまいます。佐那子は最後まで竜馬を自分の夫だと信じていたらしく、現在も信州の地に「坂本竜馬妻」という墓標が残っています。いやはやなんとも気の毒な話です。

お龍さんとの関係はみなさん御存じのとおりです。乙女姉さんへの手紙にも「なかなか面白い女にて…」といった文面がみられます。煮炊きや掃除が全然ダメだったそうで、茶道などの芸事が得意な気の強い女性でした。写真が現存していますが細面の京美人です。あの有名な寺田屋事件でも幕府の役人が寺田屋に踏み込もうとした際、入浴中の彼女が階段を駆け上がって竜馬と長府藩士三吉慎蔵にいち早く報告しています。竜馬は踏み込んできた捕縛吏に対しピストルで応戦しましたが、左手の親指に深手を負い出血多量ながら辛う

じて薩摩藩屋敷に逃げ込みました。竜馬は薩摩藩側に丁重に保護され、疵療養のため藩内の温泉にお龍さんともども出向きましたが、これが我が国最初の新婚旅行とされています。

この旅行の様子を乙女姉さんに手紙で報告しますが図入りの楽しい内容です。いかにも竜馬らしい手紙と私は思いました。

江戸留学の際、勝海舟との出会いがその後の竜馬の運命を決定づけました。

ある日、千葉定吉長男の重太郎とともに暗殺目的で勝海舟宅に赴きましたが、逆に現在の日本の貧弱な国情について諄々と説得されて、その場で海舟に弟子入りしています。

「今の幕府はもう屋台骨が古すぎて日本を救えない。国内諸藩が力を合わせてアメリカやロシアに立ち向かわないと日本は潰されてしまうよ」といった内容でした。海舟は御家人という下級士族ながら齒に衣着せぬ発言が多かったようで、慶喜公とは最初から相性が悪かった人物です。竜馬は海舟の妹婿の佐久間象山や肥後藩出身の横井小楠を紹介され、当時の世界の状況について耳学間ながら世界知識を得ています。

また彼は土佐藩脱藩後は同じ脱藩浪士を集めて「海援隊」を創設しました。

その後、犬猿の仲の長州藩と薩摩藩を結びつけた「薩長同盟」に奔走したことは有名な話です。米不足の薩摩藩と武器不足の長州藩との間でそれぞれ足りないものを交換させたのが竜馬のアイデアでした。この結果、お互いの憎悪が解けて薩長同盟が成立し、両藩は武力討幕へと動いていきます。

その後は「大政奉還」という難事業に取り組んでいます。諸侯会議の席で土佐藩代表の後藤象二郎は幕府の政治を朝廷に返上するように慶喜に求めています。後藤象二郎は竜馬の長年の盟友でしたが、諸侯会議直前に「朝廷へ政権返上を促すよう強く説得するように」との竜馬の根回があったようです。結局、慶喜公は朝廷に政権を返上することになります。

竜馬という一介の脱藩浪士がこういった大掛かりな政治活動を行ったわけです。

大変な行動力ですが、この後も有名な船中八策を立案し、後藤象二郎に提示しています。これは

大政奉還後の新国家案ですが、当時海援隊士の長岡謙吉が筆記した実物が現存しています。土佐藩はこれを藩論として薩摩藩と盟約を結びました。こうして薩長土肥という武力討幕派が成立していくわけです。

船中八策の原案はどうも当時のアメリカ政治をモデルにしたと推測されますが、横井小楠や佐久間象山など当時の外交通からの情報と考えられます。この後この船中八策は明治憲法の基本骨格になっています。

その後竜馬は越前藩の松平春嶽公のもとに出向き「貴藩三岡八郎殿（のちの由利公正公）を新政府の財政担当者として推挙したい」と申し出ています。これは大政奉還後の新政府陣容づくりの一端でした。幕末当時は財政通が国内に稀でした。三岡は当時の越前藩の逼迫した藩財政を立て直したことで有名だったため、竜馬が第一に推挙したようです。

竜馬はもともとが商家出身でのびのびと育ったため、武家のような固定観念もなく自由な発想ができた、当時としては稀有な人物でした。

こういった大事業が終わった直後の慶応 3 年に京都近江屋で中岡慎太郎と共に暗殺されています。当時、竜馬暗殺後に最初に現場に駆け付けたのが海援隊士の伊達陽之助（のちの陸奥宗光公）でした。最初は新選組が疑われましたが、幕府の警察組織「見廻組」が犯人というのが現在定説になっています。竜馬は自身が幕府に付け狙われていると知っていたようですが、維新の夜明けを見ることもなく無念の最後を遂げました。北辰一刀流の免許皆伝の腕を持ちながら、あっけなく暗殺されてしまったのです。

竜馬の本音は政治参加ではなくどうも「海援隊を率いて世界相手の貿易事業をしたかったのではないか」と現在考えられています。当時の竜馬の言動にそういった内容が散見されるためです。

勝海舟は明治維新後に「大政奉還？ あれは竜馬が全部一人でやったことだよ」と告白していますが、これだけの仕事の後 30 歳の若さで天に召されたのはまさに天命であり、竜馬は維新史の奇跡だといえます。

参考文献：司馬遼太郎著 竜馬がゆく

勝海舟著：氷川清話など